

古フランス語における 2 格体系 の崩壊と語順の関係について⁽¹⁾

春 木 仁 孝

0. 現代フランス語とは異なり、古フランス語 *ancien français* は、主格 *cas sujet* と斜格 *cas régime* からなる 2 格体系を持っていた。⁽²⁾ 一般的に、格を持つ言語においては、格の用法やその乱れと語順との間に何らかの関係があるのではないかと考えられるが、ここでは、*Marie de France* の譚詩 *Lais* を対象にして、そこにみられる 2 格体系の乱れと語順の関係について考察してみたい。*Marie* の *Lais* は、12 世紀の後半に英国で書かれたと考えられているが、*Marie* の言語そのものが *anglo-norman* 方言であったかどうかは別として、ここで用いるのは写本 H と呼ばれる *anglo-norman* 方言の写本に最も忠実であると考えられている A. Ewert による刊本である。

1. まず古フランス語の 2 格体系の状況を簡単にみてみよう。殆どどのロマンス語が格を失なったのに対し、ガリア地方では何らかの原因により語末の *s* がかなり遅くまで保たれ、古フランス語には表 1 のような格体系が見られた。

		M1	M2	M3	M4	F1	F2	F3	F4
Sing.	c. s.	murs	pere(s)	cors	sire(s)	flor(s)	rose	voiz	suer
	c. r.	mur	pere	cors	seignor	flor	rose	voiz	soror
Pl.	c. s.	mur	pere	cors	seignor	flors	roses	voiz	sorors
	c. r.	murs	peres	cors	seignors	flors	roses	voiz	sorors

表 1

s もしくは *z* で終わる名詞は男女とも無変化であり (M3, F3)、少数の F4 型を除き、女性名詞には格の対立は認められない。但し、F1 型においては類推により単数主格に *s* が現われることがあり、たとえば *Chrétien de Troyes* の作品ではこの *s* がかなり規則的に現われることが知られている。*Lais* においては、F1 型の単数主格に *s* が現われるのは極めて希で、今回の調査では次の 1 例にみられただけである。⁽³⁾

(1) *Ne sai u jeo sui arivez*

Coment ad nun ceste citez. (G. 331-32)

これは *rime* の必要による例外とも考えられる。男性名詞においても M4 型は少数であり、M2 型の単数主格にはかなり早くから類推で *s* がつくことが多かったので、結局 M1 型で男性名詞の格体系を代表させることができる。さて、この格体系は 12 世紀の間はかなりよく保たれていたが、次第に乱れ始め、地方差・個人差はあるが、14 世紀にはほぼ完全に失なわれてしまった。但し、これはあくまでも文書のうえでのことであり、口語における 2 格体系の崩壊はもっと早かったであろうと考えられる。次に格体系崩壊の地方差であるが、西部方言、中でも *anglo-norman* 地方においては、この乱れは非常に早くからみられ、*Lais*

においても以下の例にみられるようにかなりの格の乱れが認められる。⁽⁴⁾ カッコの中に示したのが、格を守った形である。

(2) (a) Li chevaler ad cunge pris ; (chevalers, Y. 195)

(b) E un vent devant eus leva

Que luin del hafne les geta ; (uns venz, El. 817-18)

(c) Deu, tant est dur le partement ! (li partemenz, El. 604)

(d) En vus est tut mun confort ! (tuz mis conforz, El. 672)

尚、格の乱れは主格の代わりに斜格が用いられるという姿で起こるのが一般的であるが、時として斜格の代わりに主格が用いられている例も見出される。

(3) Li reis ki plus esteit grevez

E damagiez e encumbrez

Vodrat aider a sun poeir. (Le rei, El. 107-09)

この例では、aider の目的語である le rei が、恐らくそれに続く主格の関係代名詞に影響されて、主格に置かれたのであろう。

2. 次に語順についてみてみよう。ラテン語においては、格体系のおかげで、理論的には語順は自由であった。しかし、真の意味で自由であった訳ではない。Väänänen は、その Introduction au latin vulgaire の中で、

(...) la disposition des mots en latin n'est pas indifférente, loin de là: elle est réglée, d'une part, par certaines habitudes et préférences, d'autre part, par des considérations de sens, de style ou de rythme. En particulier, la position finale était ordinairement réservée au verbe précédé de ses compléments, tandis que le sujet se plaçait de préférence au début de la phrase. On abandonnait cette habitude soit pour mettre en relief un élément de la phrase, soit pour obtenir une suite de mots qui correspond aux besoins d'euphonie ou d'expressivité. (Väänänen, p. 163)

と述べ、ラテン語において理論上許される様々な語順は対等の関係にあったのではなく、やはりより一般的・基本的な語順とその変異という関係にあったことを明らかにしている。また G. Serbat も、Les Structures du latin で同様の事を述べ、さらに次の様に言っている。

(...) c'est qu'à l'ordre usuel en français sujes-verbe-ct d'objet correspond un ordre latin sujet-ct d'objet-verbe. (ct=complément)

(Serbat, p. 141)

古フランス語における語順はどうであったかという点、2格体系のおかげで、理論上は次の6種類の語順が可能であった。

I. S-V-(C) II. C-V-S III. S-C-V IV. V-S-(C)

V. *C-S-V VI. *V-C-S

このうち、動詞が2番目の位置にくるIとIIが最も頻繁に用いられ、補語が主語の前にくるVとVIは非常に希である。参考に、Lanval と題される lai における各語順の頻度を下に記しておく。

I. 97 (64.7%) II. 18 (12.0%) III. 16 (10.7%)

IV. 13 (8.7 %) V. 1 (0.7 %) VI. 5 (3.3 %)

これら6種類の語順は、主語と動詞の位置関係によって、S-V型とV-S型に大きく分けることができる。先に見たように、古フランス語においては、V-SよりもS-Vの語順の方が圧倒的に頻度が高く、ラテン語においても基本語順はS-Vであり、現代フランス語においても勿論、基本語順はS-Vであることから、古フランス語における統語的に基本となる語順はS-V-(C)であったと言ってよいであろう。⁽⁵⁾

3. 以上で格体系と語順の概観を終え、いよいよこの両者の関係についてみてゆくことにする。実際には、格を保持していた男性名詞が直接の対象になる。また今回は、主語の名詞句に限定して考察を行なう。

一般的に名詞句の統語関係は、1) 語順、2) 接辞、前置詞等の標識によって表示されると考えられるが、古フランス語においては主語という文法機能は、先に見たように単数においては-Sの存在、複数においては-Sの不在という格体系と、S-Vという語順の二つの手段によって表示されていた。ここで、格変化のなかった女性名詞、及び大半が早くから格変化を失っていた固有名詞にあっては、主語という機能を明示的に表示するのは、S-Vという語順だけであったことを思い出しておこう。この事実からも、男性名詞においてたとえ格の区別が完全に守られていたとしても、主語の表示には格だけでなく、語順もある程度の役割を果たしていたのは疑いがない。Laisのようにその2格体系がかなり乱れているような状況においては、男性名詞の場合も、女性名詞や固有名詞の様に、主としてまず語順によって主語という機能が表示されていたのではないかと予測されるが、実際はどうであったのだろうか。

今回は、Laisの中からLanval, Yonec, Guigemar, Eliducの4編⁽⁶⁾ 総数3270行を調査した。主語の名詞句は、合計544例であった。尚、3人称の代名詞であるcilとcele及び中性のtoutは除いてある。このうち女性名詞が188例、男性名詞が366例である。この中に主人公の名前によるものが61例あるが、LanvalとGuigemarは常に無変化であり、⁽⁷⁾ Eliducは29例のうち12例が主格をとっている。Yonecは主語としての例は無い。これらを含め、固有名詞は別扱いとした。さらに、語源的にsまたはzで終わる名詞と、動詞の無い例を除くと、結局対象となるのは289例である。

この289例を、格と語順で分類したのが表2である。

S-V	219例	{	C. S.	143例	(65.3 %)
			C. R.	76例	(34.7 %)
V-S	70例	{	C. S.	58例	(82.9 %)
			C. R.	12例	(17.1 %)

表 2

全体の75.8% (219例) が格を守っているが、全体の数字を見て気がつくのは、V-Sという語順では斜格の例が非常に少ない(17.1%)という点である。即ち、主語の機能の表示に関しては一の環境であるV-Sにおいては、82.9%の高率で主格が守られているのに対し、主語の機能の表示に関しては十の環境であるS-Vにおいては、その約3分の1の例に格の乱れが認められる。表3を見れば、S-Vという語順と主格とが、主語の機能の表示

に関して、互いに相補ない合っていることが予測される。語順については S-V を + で、格については主格を + で示したものが表 3 である。

語 順	格	
+	+	143 (49.5 %)
+	-	76 (26.3 %)
-	+	58 (20.1 %)
-	-	12 (4.2 %)

表 3

主語の表示に関して語順、格ともに - であるものが少ないのは当然であるが、どちらかが + であればその数が急に多くなる点に注目しなければならない。

ここで、もう少し客観的な裏づけのために、 χ^2 検定という統計学的手法を用いて、語順と格との関係を調べてみよう。⁽⁸⁾ 計算の結果、 χ^2 は 7.72 であるので、主格をとるのか斜格をとるかという現象と、S-V 又は V-S の語順との間には何も関係がないという帰無仮説は、1% の危険率で棄却することができる。つまり、Lais において、主語である男性名詞の格の乱れと語順の間には関係があることが、統計学的にも明らかな訳である。S-V の時には、格による主語の表示は余剩的になるので主格でも斜格でもよいが、V-S の時には、主語を表示できるのは格だけであるので、名詞は原則として主格に置かれると考えられる。しかし、V-S でありながら斜格に置かれている例が、12 例ある。それらを検討してみよう。

- (4) a) *Vers Excestré en cel païs*
Maneit un humme mut poëstis, (El. 91-92)
- b) *Asez le m'ad humme dit sovent* (L. 279)
- c) *Ne li deit humme turner a mal* (El. 354)
- d) *Ceo vus peot humme dire pur veir* (El. 1088)
- e) *Que aparailot le felun.* (Y. 296)
- f) *Deu, tant est dur le partement!* (El. 604)
- g) *En vus est tut mun confort!* (El. 672)
- h) *D'eles deus ad li lai a nun*
Guïdelüec ha Gualadun. (El. 21)
- i) *Fu Guïgemar le lai trovez,* (G. 884)
- j) *Mut furent tuz pur lui dolent:* (L. 419)
- k) *Mut se pena chescun pur sei* (El. 1177)
- l) *De la vile s'en sunt parti*
Li dameisel e ele od lui. (El. 793)

先ず気がつくことは、*humme* が 4 例もあることである (a)~d))⁽⁹⁾。Ewert 版ではこの 4 例は、すべて主格 *hum* に修正されているが、それは斜格のままでは 4 例とも音節数が一つ余分になるためである。⁽¹⁰⁾ また、たとえば b) の例は、4 写本のうちで斜格になっているのは写本 H だけである。⁽¹¹⁾ こうしたことから a)~d) の例は、写本 H の *copiste* が用い

た写本では、おそらく主格であったのではないかと考えられる。写本Hの copiste が斜格を用いたのは、hum の主格と斜格とが別々の単語としての萌芽を見せ始めていた事に影響されたのかもしれない。次に e), f), g) の例は、rime の必要性から斜格が用いられたと考えられる。従って、12例のうち7例は何らかの説明が可能であり、V-Sで斜格が理由なく用いられているのは僅か5例しかないことになる。

要約すると、格の乱れはでたらめに起こっているのではなく、斜格が頻繁に見られるのはS-Vという語順により主語が明示的に表示されている環境においてであり、V-Sにおいてはかなり厳密に格が守られていた。

4. ここで少し違った角度から、格の乱れに何か他の要因が関係していないかを調べてみよう。まず思い出されるのは、P. Guiraud の actuel-virtuel 説である。彼は、「ローランの歌」の中で、virtuel なものをさす名詞においては主格が斜格に置き換えられていると述べた。⁽¹²⁾ この説はいろいろと批判されたが、その一つとして Woledge ら4人のイギリス人がコンピューターと統計学を用いて、Guiraud の説を批判すると同時に、「ローランの歌」における格の乱れが様々な要因の影響を受けていることを示す論文を発表した。⁽¹³⁾ 彼らは、copiste が主格を用いるか斜格を用いるかの選択に影響を及ぼす可能性のある要因として10ばかりあげているが、中でもS-V, V-Sの語順, déterminé か non-déterminé (これは Guiraud の actuel と virtuel にあたる) か、肯定文か否定文かといった要因が特に重要であるとしている。そこで彼らにならって、Laisにおけるこれらの要因と格の乱れについて調べてみよう。まず détermination については表4から、 χ^2 は 33.12 となり、この二つの現象はかなり関係があるようである。⁽¹⁴⁾ 興味深いことに、Lais の結果は、「ローランの歌」におけるよりもかなり高い程度で Guiraud 説に合致している。⁽¹⁵⁾

	déterminé	non-déterminé	somme
C. S.	179	22	201
C. R.	53	35	88
somme	232	57	289

表 4

次に肯定・否定との関係は、 χ^2 の値が 5.46 であり、「ローラン」におけるほどは格の乱れとの関係は強くないようである。Woledge らは触れていないが、他動詞の主語かどうか、主語が有生か無生か、主語と動詞が離れているかどうかについても調べてみたが、結果は主語が有生か無生か ($\chi^2 = 3.70$)、他動詞の主語かどうか ($\chi^2 = 3.12$) の区別がやや関係があるのかもしれないというものであった。

結局、語順以外に格の選択に大きく影響したと考えられるのは、déterminé-non-déterminé の区別だけである。ここで興味深いのは、Woledge らの論文においてはS-Vの語順はむしろ主格の使用を促し、V-Sは逆の効果を持っていたとしている点である。この点については Laubscher (1965), Guirad (1962), Moignet (1966) も同様の事を言っており、また J. Chaurand も Prise d'Orange においてもS-Vで冠詞つきの時に格の乱れが最も少ないと述べている。⁽¹⁶⁾ Woledge らも、mot imparisyllabique においては確かに Moignet らの言う通りだが、mot parisyllabique におい

てはむしろ逆であると述べ、その理由については保留している。Moignet ら 古フランス語の専門家が S-V と主格の使用を関係づけ、Wolledge らもその逆の現象を前に当惑を示しているのは実に意外であった。確かに、S-V が主格の使用を推進している作品もあるかもしれないが、主語の表示という観点から格の乱れを考えるなら、V-S においてこそ主格の使用を期待するのが当然と思われるからである。この点に関して、Wolledge らの論文と Lais の状況を少し比較してみよう。mot imparisyllabique については、「ローラン」と Lais は表 5 の様な状況である。

	C. S.	C. R.	somme
S-V	164	10	174
V-S	133	18	151
somme	297	28	325

a) ローランの歌

	C. S.	C. R.	somme
S-V	49	7	56
V-S	11	5	16
somme	60	12	72

b) Lais

表 5

「ローラン」では S-V における方が明らかに格の遵守率が高い。一方、Lais においても S-V の方が格の遵守率が高い。しかし、V-S で斜格の 5 例は、先に検討した 4) の a)~e) であり、一応説明のつくものである。また S-V で斜格の 7 例もすべて humme の例で、音節数から考えて少なくともその 5 例は、やはり主格であった可能性が考えられる。つまり、mot imparisyllabique においては、語順に関係なく、主格と斜格の明白な形態上の対立ゆえに格意識が強く残っており、humme に関しては先に見た理由で斜格の形が見られるのであろう。「ローラン」においても、mot imparisyllabique はより保守的で 91.4% が格を守っており、斜格の 28 例中 14 例が hume であり、その他の例も説明のつくものが多い。百分率でみれば確かに S-V の方が主格を取る率が高いが、 χ^2 は 3.91 であり、1% の棄却域で考えるとこの場合、語順と格は関係がないということになる。Lais の場合、実測数が小さいため検定はできないが、似た様な状況である。以上のことから、格と語順の関係を調べるにあたっては、mot imparisyllabique は別扱いにするべきであると考えられる。

5. さて先に見たように、男性名詞に関しては少なくとも V-S の語順では格が統語的的重要性を持っていたことになるが、この事実にとどの程度の重さを置いていいものであろうか。それを知るためには、格の区別がなかった女性名詞による主語の語順を調べる必要がある。男性名詞において格がかなりの重要性を持っていたのなら、それを持たなかった女性名詞は、圧倒的に S-V の語順をとっていたのではないかと予想される。ところが表 6 に示した様に、男性名詞の 75.8% が S-V であるのに対し、女性名詞はそれよりもやや低い 70.9% が S-V であり、 χ^2 が 1.39 であることから分かる様に、S-V、V-S の語順と男性・女性名詞の別、つまり格があるかないかということとは全く関係がないといえる。

以上の事から、実際は、格は語順に比べ統語的機能が小さく、その担う情報量が小さかったといえる。つまり男性名詞に格の区別がなくとも殆んど支障のない状態になっていたわけである。換言すれば、Lais においては語順の固定化が格の崩壊に先立っていたことは確かである。⁽¹⁷⁾

	nom fém.	nom mas.	somme
S-V	129	219	348
V-S	53	70	123
somme	182	289	471

表 6

6. 最後に、格の崩壊を名詞の内部体系から考察してみよう。この小論で見てきたように、格は語順と密接な関係にあった訳だが、言語変化というのは常に様々な要因が絡まり合って起こるものであり、できるだけ多くの側面から考察するべきであろう。男性名詞においては、-S が付加される単数主格と複数斜格が形態的には有標であった。機能の面では、数に関しては一般的に単数が無標、複数が有標であると考えられる。格については、古フランス語では主格は、主語、呼びかけ、主格補語の場合に用いられ、それ以外の関係を表わす時は斜格が用いられており、emploi absolue と考えられる提示の場合にも斜格が用いられることが多かった⁽¹⁸⁾ことなどから考えて、主格が有標であったと考えられる。従って、二つの機能それぞれの有標・無標の対立と、形態上の有標・無標の対立が複雑に絡んで、次の図のような緊張状態にあったと考えられる。

		数			
		Sing. -	Pl. +		
格	C. S. +	-S	⇒ ↑	+C. S.	格
	C. R. -		-S	-C. R.	
		Sing. -	Pl. +		

図から分かる様に、均衡が少し傾けば、すぐにより安定した体系へと移行するのは必至であった。しかし可能な2方向のどちらに変化を始めるかについての内的要因は何もなかったのである。確かに、古典ラテン語の時代から格が消失する傾向はあったと言える。Sapientiae の言う drift である⁽¹⁹⁾。しかしこの傾向も、あくまでも統語的な要因に裏づけされていたのであり、Väänänen もラテン語の格の消失について、統語的發展が先であり、そこに音声的要因が融合したのであると言っている⁽²⁰⁾。古フランス語で語末の子音が脱落し始めたのは、たとえば Fouché は12世紀中葉ぐらいからと述べているが⁽²¹⁾、一般に音韻変化・脱落などは常に音声的に同一の環境に起こるものではなく、統語上の曖昧性を生じる場合には制約を受けるということは、最近の Labov らの社会言語学的調査をみても明らかである⁽²²⁾。古フランス語においても、S-V という語順が次第に文法化し始めたことにより、格体系の持つ情報の余剰性が大きくなり、その結果、不安定な名詞体系は現代フランス語にみられる

安定した体系へと移行し、表層における形態上の格の区別はなくなったと考えることができる。

註

- 1) この論文は、日本ロマンス語学会第13回大会で発表したものを一部修正したものである。
- 2) 以下、表においてはC. S., C. R. と略記する。
- 3) 女性名詞に関連して問題になるのは、*amur* である。この名詞は一般には女性だが、擬人化されキューピドンの意では男性扱いになる。今回の調査では、擬人化されていると思われる例は3例(G. 499, L. 118, E1. 304)あったが、Ewert はE1. 304の例のみを擬人化されたものとしている。ここでは、この3例は男性名詞から除外した。J. Frappier (1967) 参照。
- 4) M. K. Pope (1934), § 1246.
- 5) 最近の言語の普遍性についての研究でも、V-S 言語よりもS-V 言語の方が多いということである。Greenberg (1963) 参照。
- 6) *Abréviation* は以下の通り。L = Lanval, Y = Yonec, G = Guigemar, E1 = Eliduc.
- 7) 今回、取りあげなかった *lai* においても、一般に主人公の名前は無変化であり、この点 Eliduc は例外的といえる。
- 8) χ^2 検定については、松下嘉米男「統計入門」岩波全書、1975年；Charles Muller. (1968) *Initiation à la statistique linguistique*. Larousse. 等を参照。以下で χ^2 検定を用いる場合には、棄却域を1%にとり、 χ^2 の値が棄却域5%以内の場合には、その結果は示唆的なものとして扱う。また、必要な場合にはイエーツの補正を行なった。自由度1の場合の1%水準の棄却域は $\chi^2 > 6.6$, 5%水準の場合には $\chi^2 > 3.8$ である。
- 9) 後に触れる Woledge et al (1967-69) に、「ローランの歌」においてもV-S で斜格の例に *humme* が多いことが指摘されている。
- 10) Ewert (1944) p. 158, *rejected readings of Ms. H of the A. 4. (b)* 参照。
- 11) Rychner (1958) 参照。
- 12) Guiraud (1962), 同(1963) pp. 117-121 参照。
- 13) Woledge et al (1967-69)。
- 14) *déterminé* の決め方については、Woledge らに一応従った。Woledge et al (1977) p. 148 参照。
- 15) *déterminé* のうち C. S. のものは、Lais 77.2%, Roland 77.7%, 一方 *non-déterminé* で C. R. のものは、Lais 61.4%, Roland 34.3% である。
- 16) Chaurand, (1969) p. 36.
- 17) この結論は、一般言語学的考察からも導き出されるものであるが、それについては、別の機会に発表予定であるので割愛する。
- 18) Ménard (1973) p. 21, 2の *Remarque* 参照。
- 19) Sapiar (1921) の7章, 8章参照。
- 20) Väänänen (1967) p. 124.
- 21) Fouché (1966) p. 663.

- 22) Kiparsky (1972) と, そこに引用された Labov et al, Moore, Lindgren
らの論文, また Hooper (1976) pp. 32-41 も参照。

Édition

- Ewert, Alfred. (1944, 1969⁸) Marie de France : Lais. Oxford :
Basil Blackwell.
Rychner, Jean. (1973) Les Lais de Marie de France (C. F. M. A.
93). Paris : Champion.
..... et Paul Aebischer. (1958) Le Lai de Lanval. Genève :
Droz.

参考文献

- Chaurand, J. (1972) Histoire de la langue française. Paris : P.
U. F.
Fouché, P. (1966) Phonétique historique du français : Tome III,
Les Consonnes. Paris : Klincksieck.
Frappier, J. (1967) 《D'amors, par amors》, Romania 88, p. 433-
74.
Greenberg, J. H. (1963) Some Universals of Grammar with Parti-
cular Reference to the Order of Meaningful Elements. in
Greenberg (ed.) Universals of Language, p. 73-113.
Cambridge : M. I. T. Press.
Guiraud, P. (1962) 《L'expression du virtuel dans le Roland
d'Oxford》, Romania, 83, p. 289-302.
..... (1963) L'ancien français. Paris : P. U. F.
Hooper, J. B. (1976) An Introduction to Natural Generative
Phonology. New York : Academic Press.
Kiparsky, P. (1972) Explanation in Phonology in S. Peters (ed.)
Goals of Linguistic Theory, p. 189-227. New York : Pren-
tice-Hall.
Laubscher, G. G. (1965=1921) The Syntactical Causes of Case
Reduction in Old French New York : Kraus Reprint.
Ménard, Ph. (1973) Manuel du français du moyen âge, 1. Syntaxe
de l'ancien français. Bordeaux : SOBODI.
Moignet, G. (1966) 《Sur le système de la flexion à deux cas
de l'ancien français》, Travaux de linguistique et de litté-
rature de Strasbourg, IV, 1, p. 339-356.
Pope, M. K. (1934) From Latin to Modern French with Especial
Consideration of Anglo Norman, phonology and morphology. Man-
chester : Manchester University Press.
Sapiar, E. (1921) Language. New York : Harcourt Brace.
Serbat, G. (1975) Les structures du latin. Paris : Picard.

Väänänen, V. (1977) Introduction au latin vulgaire. Paris :
Klincksieck.

Woledge, B. et al. (1967-1969) « La déclinaison des substantifs
dans la Chanson de Roland, recherches mécanographiques. »
Romania, 83, p. 145-174, et 90, p. 174-201.

Résumé : « On the correlation between two-case system and word
order in Old French »

Generally speaking there is always some correlation between a surface case-system and word order. In this article we examine the correlation between the disintegration of the two-case system and the word order of Old French (O. F. henceforth). For this purpose we use four Lais of Marie de France as our corpus. By the collapse of two-case system in O. F. we mean the use of the oblique case in a subject noun phrase (and this noun was a masculine noun because most feminine nouns had no case distinction in O. F.). As for word order, we can posit S (subject)-V (verb) as the basic order in O. F.

From the functional point of view both the subject case and the word order S-V were relevant to the indication of a subject. But as we noted above, most feminine nouns had no case distinction, which declares that word order played a main role in indicating a subject.

75.8 percent of the subject noun phrases provide the correct case forms. But what is more worth noting here is that the oblique cases in the subject noun phrase after verbs are very few (17.1%). In other words, V-S word order (which plays no role in indicating a subject) almost always occurs with the correct case form, but in S-V word order (which itself suffices to indicate a subject) we encounter many subject noun phrases in which the oblique case form is used in place of the subject case. Moreover, the proportion of the two word orders is almost the same in both cases (subject noun phrases with masculine noun and those with feminine noun), which means the information burden of the case system was redundant. We can conclude that the fixing of word orders occurred prior to the disintegration of the case system, at least in the Lais. (Additionally this conclusion can be arrived at from General Linguistic point of view).

At the end of this article we consider the internal structure of the noun system in O. F. This consideration clarifies that this system lacked the structural stability and was easily chang-

ed into a more stable structure by the grammaticalization of S-V word order.